

令和五年度 前期入試問題 解説

【五〇分・一〇〇点・詳細非公表】

【一】説明的文章（論説）

〈出典〉『スマホを捨てたい子どもたち』ポプラ新書出版

多くの高校生がスマホを手にながら、「スマホを捨てたい」と述べた言葉の裏に、スマホで人とつながることに漠然とした不安を感じていることを明らかにしている著。およそ二〇〇万年前の人類の歴史とゴリラ研究の見地から、これからの「未知の時代」を生きる、生物としての人間らしさを考える。先が見えない時代、自然やテクノロジーと共生していくための知見を示す。

〈著者〉山極 寿一

一九五二年、東京都生まれ。霊長類学・人類学者・京都大学総長。ゴリラ研究の世界的権威。ルワンダ・カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキーセンターのリサーチフェロー。京大霊長類研究所助手、京大大学院理学研究科助教授を経て同教授。二〇一四年から京大総長、二〇一七年から日本学術会議会長を兼任。主な著書に『サル化』する人間社会、「京大式おもしろい勉強法」「ゴリラからの警告『人間社会（こ）がおかしい』など多数。

問一 漢字の問題

a 祖先 b 確率 c 提案 d 牧畜 e 喜怒

漢字の学習は、音読して読みを確認し、書いて筆順や、部首、意味などを確認して練習することが望ましい。書き練習の

際は、一画一画丁寧に書くことを心がけよう。

問二 同義関係の理解

傍線部①は形式段落7)において、「この大きさの脳に見合った集団のサイズが100〜150人。これが②にあたる数です」と説明されている。また、その数の持つ意味について9)で牧畜を始めた人間社会の具体例を上げて説明が展開され、10)で「言い換えれば」という要約を示す接続詞の後「150人というのは、昔も今も、人間が安定的な関係を保てる人数の上限だということですよ」とまとめられており、設問の条件にあてはめ、「人間が安定的な関係を保てる人数」と抜き出すのが正解となる。

問三 因果関係の理解

筆者は現代の人間が如何にして脳を大きく発達させてきたかを具体例を交えながら述べている。4)〜7)では集団の規模と脳の大きさの相関を示し、8)ではイギリスの人類学者の仮説を引用し、より筆者の考察を確かなものとしている。よって、脳の大きさが集団規模に関係しているという結論からするとイが正解。

問四 情報の整理要約

6)で700万年前の集団サイズは10〜20人。200年前は30〜50人程度と述べている。よってiはア、iiはウが正解。《人間の变化》をまとめた箇所では熱帯雨林を出たことで集団の規模を大

大きくさせたことが4で述べられている。字数条件に照らして抜き出すとiiiは「集団規模」が正解。ivは集団規模が大きくなったことにより起こる変化を述べた5にある「トラブル」が正解。それにより、よりよい対処が必要となったため人間の脳は大きくならざるを得なかったのである。よってvは「脳」が正解。

#### 問五 内容展開の理解

言葉を使ったから脳が大きくなったのではないのです」という筆者の主張の一文がどの形式段落の末尾にあるのが適切かを考える。脳が大きくなった理由について言及し、言葉を人間が話し始めた時期と脳が大きくなった時期の差異を示した5の末尾にあるのが適当。

#### 問六 表現と効果の理解

形式段落ごとのつながりや役割を意識して、具体例や比喩、主張、対比や同意などを読み進めることで筆者の主張の正確な理解につながる。

選択肢Aは正解。読者の身近な具体例について思考させることで、論旨の理解を深める効果がある。選択肢イは「読者として学生を想定しており」が誤り。

「学生などに聞いた限り」という前提が読者対象を絞る根拠にはならない。選択肢ウは「ゴリラの集団サイズの変遷と対比して」が誤り。人間の脳の大きさの変化と集団サイズの変遷について述べているが、ゴリラの集団サイズの変遷は述べられていない。選択肢エは正解。選択肢

オは「比喩表現や具体例を用いて」が誤り。具体例は多用しているが、比喩は用いていない。

#### 問七 複数資料の比較・統合の問題

複数の資料から得られる情報を比較・統合して理解する力を問う問題。内容に即していないのは生徒D。「現代人は明確に把握しながら」「関係の構築を拒否」が不適切。

#### 【二】文学的文章（小説） 〈出典〉

『架空の球を追う』文芸春秋

直木賞受賞直後から「オール讀物」に連載され好評を博していた短編をまとめた作品。少年野球の練習を見つめる母親たち、銀座の飲み屋で久しぶりに集まった女友達、歯痛の社長にハチの巣退治を命じられ、右往左往するイギリスの同僚たち、高級スーパーマーケットでの夕飯の買い物風景、ドバイへ婚前旅行に行ったカップルを襲うざらついた空気などなど、国内外問わず日常のふとした瞬間を捉え、人の心の機微を細やかにそしてユーモラスに描き出した珠玉の短編集。

『泣いたあととは、新しい靴をはこう。』

ポプラ社（日本ペンクラブ編）

ままならない人間関係、経済的な苦しさなど、いま、逆境のただなかにいるティーンズの悩みに、ペンクラブ作家が言葉をもって向き合いメッセージを寄せた著

〈著者〉

森絵都(もりえと) 一九六八年、東京都生まれ。小説家。一九九〇年『リズム』で講談社児童文学新人賞、一九九五年『宇宙のみなしご』で野間児童文芸新人賞、一九九九年『カラフル』で産経児童出版文化賞、二〇〇三年『DIVE!』で小学館児童出版文化賞、二〇〇六年『風に舞いあがるビニールシート』で直木賞受賞。著書に『永遠の出口』『ラン』など多数。

#### 問一 表現技法の理解

「無数の小さな靴底」とは、具体的にはグラウンドを駆け回る少年たちのことを指している。ここではその少年たちの足元に注目し、橙色の光を蹴散らすように、たくさんの靴が活発に動き回っている様を描いている表現のため、隠喩が適切となる。

#### 問二 熟語と心情の理解

前後の定型的な表現や、文脈をもとに空欄を補充する問題。こうした問題では、選択肢を見る前に空欄の前後を読んで吟味する。iはコーチの言葉だが、直後が「くを響かせ」となっているため、「怒号」以外に入らない。iiも、空欄直後が「くを極めていく」となっており、かつ少年たちの集中できない様子を描く文脈にあるため、「混乱」が最適。iiiも、直後に「を外して」とあることに注目。「羽目」しか入らない。

#### 問三 語彙の理解

語句の意味は、辞書的な意味を答える場合と、前後の文脈で判断する場合がある。②・③については、辞書的な意味を聞いている。②は「抜け目がないこと、むだがないこと」の意。③は「激しくなること、興奮していくこと」の意。

#### 問四 指示語の内容(同義と対比関係)

傍線部に指示語が含まれているので、指示語の内容もきちんと把握する。ここでは、直前の「ひよつとすると……:思えてくる。」の部分を目指している。「錯覚」とあるように、本来は簡単なはずのフライの捕球を少年たちが全くできないために、ホームランを捕るという完全に不可能なことよりも、難しいことをしているように思えているのである。フライとホームランの違いを把握して、「錯覚」の内実を理解する必要がある。

#### 問五 因果関係と心情の理解

コーチの心情を把握する。コーチがこのとき置かれた状況を把握する必要がある。コーチは少年たちに、架空の球を追うという練習をさせようとしたが、少年たちはどんどんふざけて遊びたがる。コーチの練習意図は少年たちに伝わらず、失敗してしまったのだ。こうした状況から、傍線部の直前の「不安」という心情が生じている。もう自分が何を言っても、真面目に練習をすることはできないのではないかと懸念する心情である。

問六 間接的な心情表現の理解

「私」の心情を問う問題。ivは、空欄直後の「光景」という語句をヒントに探す。vは、傍線部の「シャッターのように」という比喩をもとに考える。これはまぶたをカメラのシャッターに見立てたものである。「貴重で得難い」光景を前に、写真を撮るかのように、その光景を自分の記憶にとどめておきたいという心情を表している。

問七 登場人物の造型と役割の理解

少年たちの描かれ方を読み取る。問五でみた通り、最初はコーチの指示に従っていた少年たちも、次第にふざけ始めてしまい、収拾がつかなくなっていく。そうした少年たちの態度の変化を読み取る。コーチも少年たちも、「欽ちゃん走り」に似た非常に滑稽な動作をしていることも注目される。

問八 文学的表現の理解

選択肢内に引用された本文と、その表現意図をふまえて正答を選ぶ。特に選択肢では、「私」の立場が問題にされている。次の問九ともかかわるが、中盤までは傍観者の立場で、少年たちの様子を見たり、母親たちの会話を聞いたりしていた「私」だが、最後の段落では母親たちに同化するさまが描かれる。そうした「私」の変化を読み取る。

問九 資料参照の技術と態度

【資料】と比較し、本文の表現意図を問う。空欄viは、「横走り」を「欽ちゃん走り」と言い換えた母親の発言を聞き、深く納得した「私」が描かれる場面。「私」は当初、横走りを見ても言葉として表現できず、「さつきから胸にもやつきながらも形にならずにいたもの」でしかなかったが、「欽ちゃん走り」という発想を得て、深く納得している。【資料】から「発想」に関する表現を探すと、「独特の発想」という表現が見つかる。viiについては、問八とも関係するが、「私」の実感が強く表れた場面である。これも母親たちの言葉による変化である。最後の生徒Aの発言から、「私」が母親たちの会話に引き込まれていく様子を表す語句を特定すると、「どうか」が適切と判断できる。

【三】 古典（言語文化）

〈出典〉

『徒然草』

江戸時代、兼好法師が書いたとされる随筆。清少納言『枕草子』、鴨長明『方丈記』とならび日本三大随筆の一つと評価されている。

『史記』

中国前漢の武帝の時代に、司馬遷によって編纂された歴史書。全百三十巻。歴代の王の記録、礼楽・制度・文化・経済などの記録、王族や諸侯の記録などから成る。人間中心の歴史書として編まれた伝記文学の傑作。

## 『武士道』

新渡戸稲造著・奈良本辰也訳。日本の武士道を欧米に紹介する目的で刊行された。思想家・教育者として著名な新渡戸稲造が、日本人の道徳心の核となっている「武士道」について解説した代表作。

### 問一 要旨に関わる重要語句の理解

空欄に的語を補うことで文章理解を問う問題。空欄 i を含む文は筆者の主張であり、前文で述べられた争いを生み、礼に背いた行動の中にある「人をはかりあざむきて、おのれが智の勝りたることを興とす」との対比によるものである。人に勝ろうと思うならば、ただ学問をしてその「智」を人に勝ろうと思うほうがよいと主張が展開されるので「智」が正解。空欄 ii は道を学んだ後に知ることができていることを述べている。これまでに筆者は人、特に「むつまじき」間柄での争いによつて起こる問題点を指摘しており、まとめにあたる空欄 ii では誰と争ってはいけないかを知るので考え、適語を吟味すると仲間を意味する「輩」が正解となる。

### 問二 熟語の理解

興は①興る(始まる。新たにする。盛んになる。栄える)②喜ぶ。楽しむ③四経の六義の一つ。という語義を持つ。本文中では「楽しむ」という意味で用いられており、二字熟語で表すと「興趣」(心に生ずる愉快的な気持ち)が正解。

### 問三 文語文における「が」

「おのれが芸の」の「が」は「わが家」といったりするように、「の」の意味、連体修飾語をつくるはららきがある。同じ用法で用いられているのは選択肢エとなる。アは「ののもの」と訳すことのできる用法、イは前後が逆の内容になる逆接の用法の「が」、ウは主語をつくる主格の「が」である。

### 問四 文語文の特徴の理解

文語文では主語や助詞など「省略」されるものが多い。よつて正しい解釈のためには前後の語句や文脈を参考にし補いながら読む態度や技術が必要である。ここでは前が「人」、後が「喜ばせよう」のため対象の意味をもつ「を」が正解となる。

### 問五 歴史的仮名遣いの理解

「たぐひ」→「たぐい」、「ゆゑ」→「ゆえ」歴史的仮名遣いの読みは音読をしながら力をつけよう。ハ行↓ワ行で発音することや、「しやう」→「しょう」とのぼして読む長音、歴史的仮名遣いのみあるワ行の「ゐ・ゑ」など、音読で練習し、現代仮名遣いで表記する練習をすること。

### 問六 因果関係をもとにした内容理解

【文章 I】の二行め「待ち負けを好む人は、勝ちて興あらんためなり」、三行め「負けて興なく覚ゆべきこと、また知られたり」と述べられている。よつて、負け

て人をよろこばせようと思うことは、全くおもしろくないのである。よってイが正解。

問七 文脈理解をもとにした古語の理解  
「争いを好む失なり」の「失」とは、具体的に何を指すのかを考える。直前に「これみな」とあることから、前述の「徳にそむけり」（道徳に背いている）「礼にあらざ」（礼義ではない）「長き怨みを結ぶたぐひ多し」（いつまでも続く怨みを心に残すというような例が多い）などといった人間が争いを好むことよって起こったすべてのことを指している。以上三つの点をまとめると、「弊害」としたウが正解。

問八 主題の理解  
争いと学問それぞれが人にもたらすものは何か。選択肢アは学問…要職への就任が誤り。筆者は学問をすることで「大きな職をも辞し」と述べている。選択肢イは正解。選択肢ウは学問…人間としての成長が誤り。筆者は人間としての成長とは述べていない。選択肢エは学問…善行の蓄積が誤り。筆者は道を学ぶことは「善に誇らず」とあり、善行を蓄積するために行うものとは述べていない。

問九 文学史の問題  
文学史は古典を学ぶ際、作品の時代背景や著者の人となりを知ることにより理解が深まる大切な知識である。時代の流れによって誕生する作品や活躍する著者が変化する。人々の生活とともに文学が

あるということを実感しながら作品の歴史観とともに味わうことが大切。単なる暗記事項としてでなく理解に努めよう。

本文は「徒然草」兼好法師著である。出典を確認すれば中学校既習の作品であるので正解できよう。なお、三代随筆「枕草子」清少納言・平安時代成立「方丈記」鴨長明・鎌倉時代も合わせて覚えておこう。

問十 言語文化に関する探究活動  
複数の資料を読みあわせて考察する過程を生徒の会話で示している。iiiとivに当てはまるのは先王が乱を嫌い不足させないようにした「欲」と「物」であり、現代語訳中では「欲望」と「物資」とあるため選択肢アが正解。「人を先にする」とは人を残念な気持ちにさせたり、自分の気持ちが満足することを優先しないことである。争いを避けることにもつながる。それが礼である。【文章Ⅰ】の文末に「道を学ぶとならば、くだだ学問の力なり」とまとめられており、傍線部④で示している内容と「道を学ぶ」が合致する。

（現代語訳例）  
人間というものは、他人と争うことなく、自己の意志をまげて他人の気持ちに従い、自分のことは後まわしにして、他人に先を譲るに越したことはない。

いろいろの娯楽でも、勝負事を好んでやる人は、勝って面白がりたいたためである。それは自分のうまさも他人よりもすぐれていることがうれしいからなのである、だから、負けたら不愉快に感ずるだ

ろうということも、またよくわかりきったことである。したがって、自分が負けて、人を喜ばせてやろうと思うならば、勝負の遊びの面白さは少しもないに違いない。こう考えると、相手の人を負かしていやな思いをさせながら、自分の心だけを楽しくすることは道徳に背いている。親しい人たちの間で冗談を言い合うにも、他人をうまく企んでだまし、自分の機知が相手よりまさっていることを面白がる。これもまた、礼義ではない。それゆえ、始めは酒宴の時の冗談から発して、後には、いつまでも続く怨みを心に残すというような例が多い。以上は、すべて、勝負事を好むことの弊害である。

人よりも優越しようと思うなら、ひたすら学問をして、その学才が他人よりも優越しようと思うのがよい、なぜならば、物事の道理を学び知るならば自分の長所を自慢せず、仲間と争ってはならないということを知り得るがためである。学問すれば、他人と競争する気持ちを超越できるのであるから、重要な役職をも辞退し、莫大な利益をも捨ててしまえるのは、ただ、学問の力によるのである。

〔出典 『徒然草』安良岡康作 訳注 旺文社全訳古典選集〕